

日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.26(1), April, 2022

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 箱根合宿研究会情報
- ♪ 定例研究会案内
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

巻頭言

真夜中の太陽

木村はるみ（身心変容技法研究会）

世阿弥は能の芸位を九段階に分け、その最上位を「妙花風」と名付けた。「九位」が書かれたのは、1428年頃で、世阿弥65歳ころと推定されている。ここから世阿弥後期に入る。

「新羅，夜半，日頭明らかなり。妙と云つば，言語道断，心行所滅なり。夜半の日頭，これまた言語の及ぶべき所か。如何。しかれば，当道の堪能の幽風，褒美も及ばず，無心の感，無位の位風の離見こそ，妙花にやあるべき。」（「世阿弥能楽論集」小西甚一編訳「九位」）「新羅，夜半，日頭明らかなり」の出典は夢想国師が足利直義に示した最後の公案93への回答である。（「夢中問答集」夢想国師 校注・現代語訳：川瀬一馬 講談社学術文庫，原本1344年刊）

「妙花風」の現代語訳では「新羅の国では，真夜中に，太陽が明らかに照らす。」と記されている。真夜中に太陽が照るわけがないのであるが，このあり得ない状況を現出させる演技を「妙花風」とした。そしてここまで達成した能楽師は名人・達人の芸位であり，「却来」することができる。修行についても中三位の芸境から始めるように順序が語られ，上三花の頂点の妙花にいたった後に，下三位に行けと示されている。「この順序で来た名人のすぐれた演技においては，下三位のわざでも上三花に類する芸となるであろう。」（小西 p294）とも述べている。芸位の最上級に深夜の日の出という絶対的矛盾である「妙」をめざしたのは何故か。時代は南北朝時代であった。世界に誇る日本の頂点文化は中世期の戦乱の中で生まれた。利休が「待庵」を創造したのもその後の戦国時代であった。たった二畳の粗末な空間で茶菓子を食する行為が高い精神性と静寂を生み出す茶道にまでなった。外の世界が喧騒と陰謀，裏切り，殺戮，疫病の乱世にあって，その真っ暗闇の現実の中で，光を見出す身心変容技法が生まれた。狭小な茶室で不動心と静寂な精神世界の「妙」が生まれた。能楽も茶道も戦乱と悲嘆の中で練り上げられた身心変容の技法であり今日まで継承されている。

先日，自分の退職祝に新作能「媽祖」を拝観した。コロナ禍で仕事の無くなった能楽師への支援として新作能制作へのクラウドファンディングに参加していたのだが，それが完成した舞台であった。そこで真夜中の太陽を見た（と感じた）。夜桜も震撼するほどの能楽師の熱演は，正に「天下の御祈祷」（風姿花伝）であり，「魔縁を退け福祐を招く」祈りの行為であった。「媽祖」となった黙娘（片山九郎右衛門）と住吉明神（野村萬斎）は舞台に渦をつくり，明神は大の字に立ち天を仰ぎ全身全霊で平和の祈りを響かせた。二人の天才の舞の「妙花」と言霊（ことだま）にみな我を忘れて震えた。

片山九郎右衛門氏は，わが舞踊研究史では意味深い名人である。90年代にロンドンでの研

修を終え、ラバノテーション（舞踊譜）を習得し帰国したころ、立命館大学アトリーサーチセンターでは、当時は最先端であった9方向からのカメラによるモーションキャプチャを使った芸能者の動作情報と記譜について研究がなされていた。まだ襲名前の若き片山氏が短パンとTシャツになってご協力くださり、身体に30数個のセンサーを付けて舞ってくださった。その時の堂々としたお姿、正確でありにも美しい所作に電子工学系の測定者は圧倒されていた。近年では日吉大社で行われた「元旦の一人翁」、「大戸開き」神事を研究調査した際、真冬零時の極寒の境内を颯爽と歩く姿、灯は蠟燭2本のみの拝殿での言祝ぎの舞を拝観した。気迫が漲っていた。それは修行者の姿であった。過酷な稽古、妙花を保持するためのはかり知れない研鑽の現れを感じた。能楽師は面を紐で頭にきつく縛りつけ、小さな穴からしか外が見えない条件の中で舞い謡う。大変な状況、大変な技法である。「能は平時の武術である」と語ったのは鎌田東二先生である。（「世阿弥 身心変容技法の思想」青土社2016）鎌田先生は体育・スポーツ哲学会第40回大会でもご講演をしてくださったのでおぼえている方もおられると思う。鎌田先生を研究代表とする身心変容技法研究会も10年目に入り、研究会は85回となった。先月はヒップホップと温泉ならびに楽園学会をめざすサーフィンの身心変容技法を医療や社会変容へとつなげる実践的研究が展開していた。

さらに技法習得の負の側面にも研究が進んでいる。宗教学の分野ではすでに語られてきた修行の失敗の研究である。中村敦の「山月記」「名人伝」をテキストとして議論中である。名人を目指し修行していた李徴は何故、名人にならずに虎になってしまったのか。修行の落とし穴とは何か。修行者が自己肥大を起こし転落・解体して行った教団の事例、虎と化した権力者が破壊と戦争を起こしてしまう現実。虎を作り出してしまう背景や社会はどのような構造なのかなど。あるいは逆に謙虚が卑下となり、自己縮小を呈し自分を失い心の病となってしまうこともある。こうした身心変容現象の負の側面を解明することは実践を通して自己変容していく体育やスポーツ、健康をめざす本領域にも関わる問題でもあると思われる。

ところで、能舞台でシテを呼び出し語らせ舞うまでにコーディネートするのはワキである。（「習道書」ワキ方の心得）ワキは舞台の角にただ座っているだけではない。全身全霊で座っているのだそう。これはワキ方能楽師である安田登氏の言である。舞台の一部始終をじっと言葉少なに誰よりも真剣に見守っている。現在、世界中で戦争と情報の嵐が吹き荒れている。先の見えない状況の中でこころは乱され、犠牲になられた多くの方々への追悼も形にならないほどである。悲嘆は絶えない。言葉にならない。この乱世の只中で静寂の中に太陽の照る「妙」の境地に憧れる。そして平和の訪れを心から願う。

木村はるみ(kimura@yamanashi.ac.jp 令和4年まで)
(rosa.kimura3214@gmail.com 今後のアドレス)

体育哲学考

オリンピックの謝罪から考える日本人の感覚

野上玲子（江戸川大学）

高校の部活動では、とにかく毎日謝っていた。先輩に足を踏まれても「(そこに私の足があった) すみませんでした」と。先輩に許可を得ないと座ってはいけないという謎のルールがあり、あー眠い眠いと思いながら朝練へ向かう電車の中で座っていると、遠くから先輩がやって来て、私はスッと立ち上がり「(先輩の許可なく座ってしまい) すみませんでした」と謝る。当時、「はい」か「いいえ」か「すみませんでした」のどれかを言えば、大体の問題は解決していた。若干の反論を加えたい時は、「いいーえ」と粘り強く言うという術を持ち、状況に合わせて使い分けていたが、最終的に謝っておけば事なきを得るという実に単純な構造であった。

今、「体育哲学考」を執筆する一研究者となり、その単純な上意下達の構造がいかに複雑で

悪しきものであったかを覚える。繰り返し実践してきた「すみませんでした」は、謙虚で素直な日本人を育ててきたのではなく、ひたすら無思考な人間を排出している状況であったように思う。今一度立ち止まって、謝罪の意味を真剣に考える必要があると、オリンピックを見て感じた。

先日、北京冬季五輪が開催され、高梨沙羅選手がスキースーツの規定違反で失格となった。その後、SNS で真っ黒に塗りつぶされた背景とともに謝罪の言葉を述べていた。大半の日本人が謝る必要はないと思っている（と思う）が、本人は謝罪することを選択した。その気持ちを否定するわけではないが、私たちは不必要な謝罪文化に終わりを告げるべき時期がきている。なぜなら、同じスーツ規定違反で失格となった外国人選手が「なぜ沙羅は抗議しないのか」と訴えるように、外国人からすると「謝罪＝不正を認める」となるからである。

納得のいかない事があっても謝るといった日本人の感覚は、外国では通用しない。他の外国人選手が「いつもと検査方法が違って」と自ら訴えているように、イレギュラーな状況を再度確認し、正しい情報を入手し、他国と協力しながら真相解明のためのアクションを起こすことが次世代の選手の未来につながる。高梨選手自身が訴える勇気がなければ、周りの大人（コーチ等）がなぜアクションを起こさないのか。高梨選手のメンタルも大事だが、泣き寝入りせずに国際舞台で意見を伝え、異を唱えることを恐れずに向かっていく姿勢こそが、今の日本のスポーツ界にとって必要不可欠なアクションなのではなかろうか。

さらに、高梨選手に多くの励ましの声が寄せられた一方で、明らかな誹謗中傷の声もあった。高梨選手の謝罪の意味は、失格によりメダルを逃してしまった申し訳なさだけでなく、これ以上の誹謗中傷を浴びないための予防線だったのかもしれない。心ない言葉の凶器で何人もの尊い命が失われていることを、決して忘れてはならない。

北京冬季五輪は多くのことを考えさせられた。ロシアのドーピング疑惑によって、またしてもスポーツと国家の深い闇を象徴するイベントとなってしまった。15歳の少女が国際社会に晒され、演技も苦し紛れに終わり、正直、辛くて見ていられなかった。大人の責任は大きい。五輪の在り方、IOCの在り方を根本的に問わなければ、子どもたちに夢や希望を与えるオリンピックの開催は一層厳しさを増すばかりである。

このようなオリンピックの価値や当時の部活動の経験が、ここ数年に渡って取り組んでいる「スポーツと全体主義」の構造を考えるきっかけになった。程度の差こそあれ、アーレント（1906-1975）が問題視した全体主義運動はあらゆる領域で見出されていると感じる。今後は、オリンピックと「大衆」の様相を分析し、哲学的思考を確保しながら、オリンピック開催に伴う全体主義の病理構造を明らかにしていく予定である。

最後に、この文章が掲載される頃には、どうかウクライナに平和が訪れていますようにと心から願う。

野上玲子 (rnogami@edogawa-u.ac.jp)

書籍紹介

石井達朗(2020)『ダンスは冒険である 身体の現在形』論創社

大橋奈希左（京都女子大学）

何事も名称は大切である。書名『ダンスは冒険である』は魅力的であり、まず読者として惹きつけられる。副題の「身体の現在形」がまた、わくわくさせる。ダンスにかかわる者が本屋で出会ったとしたら、買わずにはいられない一冊である。

著者の石井達朗氏は、舞踊評論家であり、州立ハワイ大学講師、私立ニューヨーク大学演劇科・パフォーマンス研究科研究員、国内でも慶應大学はじめ複数の大学で教鞭を執った慶應大学名誉教授である。長年世界の名だたるダンスを観て歩いて来たに違いない。新潟のはずれで21年間を過ごし、いい舞台をなまで見ていないコンプレックスの私からすると、なんとも羨ましい存在である。

その上、あとがきで、州立ハワイ大学にいて、デニス・キャロルの『演劇理論』の授業に

出ていた頃にリチャード・シュクナーの「環境演劇」に出会ったと告白している。戯曲・俳優・演出・劇場など「演劇」という従来の枠組みをご破算にした自由な考え方が新鮮だったという。舞台の活動を出来不出来の「美学」に押し込めることなく、広く社会・文化・政治などのつながりの中で捉えようとする視野の広さに魅せられたというのである。その影響が本書でも随所に現れている。

第1章現在舞踊論は「現在」に傍点が振られている。そう、現代舞踊論では決してない。ここで、「現在」舞踊論の対象とされるのは、コンテンポラリーダンスである。世の中には、冒険でないダンスももちろんある。バレエは王道ではあろうが冒険ではないし、モダンダンスも冒険の時期もあったとは思いますが、今は違うといえるだろう。そんな中で、石井が「ダンスは冒険である」とテーマにしたダンスとは、日本の暗黒舞踏も含めたいいわゆる「コンテンポラリーダンス」なのである。そして、1章の表紙をめくると「時代の共犯者としてのコンテンポラリーダンス」というテーマが出てくる。「ダンスで作品をつくることは、体のことだけではなく、その体が好むと好まざるとに関係なく、置かれている状況と環境すべてにかかわること（下線引用者）」なのだから。身体とはもっとも身近にある自然でありながら、爪を切る段階でそれはすでに文化であり、社会なのである。では「同時代」を意味する「コンテンポラリー」はいつ頃から指すのか？石井は、1987年セゾン文化財団の設立を挙げ、まちがいなく萌芽の時期であったとする。そして、「コンテンポラリーダンスは、表現の方法論においてはまったく自由である。コンテンポラリーダンスのように、男女差、世代差、職業、経験、学歴、師弟などのヒエラルキーから離れて、自分の身ひとつで表現することは、それまでの日本の歴史のなかではほとんど存在しなかった」と指摘する。日本の芸能史は、世界的にみても非常に豊かであるが、いつの時代にも表現者達は、特有のヒエラルキーに囚われてきた背景があった。教育も文化もしかりである。そのような中で、自分の身ひとつで、感覚を醸造するように舞台を創作するコンテンポラリーの独自性が浮き立つといえるのだろう。そのことが、「芸術」というカテゴリーの喪失へとつながり、石井が「行為 (action)」と呼ぶ、いわゆる「ノンダンス」についても語られることになる。観客はいらない。それは、行為者であること、参加者であることに重きを置いてのことなのである。

第2章舞踊評論の現在では、海外のバレエ団や30年後の到達点としてケースマイケルとローザスについての批評を読むことができる。ローザスについても書かれている『Who Dance?振付のアクチュアリティ』(越智雄磨他編(2015)早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)も興味を持った方は、是非この本と合わせて読んでみて頂きたい。

第3章は、舞踊対話—コトバも踊るである。いろいろな舞踊家との対話の中で、山野博大氏との対話が印象に残った。大学院時代から学校のダンス教育について考察する中で、ずっと感じてきたことであったから。山野氏は「劇場を地域の芸術文化の拠点と位置付け、優秀な人材をおいて活性化することで、国民の生活の値を高めていくんだという基本の姿勢を国が持って、それなりの財政措置をしてくれないとだめです」と指摘する。そう、そこが大きな課題なのである。だが、一方で「明治以来、日本では国が舞踊の教育に全く手を出していないんです。そういう意味で音楽や美術との差は大きい。しかし逆にそれだから舞踊に大きな可能性が残っているという考え方もできるのではないのでしょうか」とも述べている。「からだ一つで何ができるか」で評価されるコンテンポラリーダンスは、日本の芸能史が背負ってきたタテのしがらみをそぎ落とした時点で光るものがあり、舞踊の教育にも大きな可能性を与えてくれるのである。

この体育哲学の領域には、哲学はもとよりスポーツや体育授業等の書籍を日々読まれている先生方が多いことは重々存知あげているが、今回書籍紹介に挙げさせて頂いたことを機に、「冒険」してダンスの書籍にも手を伸ばしていただければ、嬉しく思う。

大橋奈希左 (oohashi@kyoto-wu.ac.jp)

今（2022/3/18）も、ロシア（プーチン政権）によるウクライナへの軍事侵攻が続く。

北京パラリンピックへの出場が危ぶまれたウクライナ選手団は大会直前に中国入りし、ウクライナのパラリンピック委員会会長は「私たちがここにいる理由は、ウクライナの存在を世界に示し戦争を止めるためだ」と強調した。（NHK 単独インタビュー）

2021年夏、コロナ禍中で TOKYO2020 オリンピックが開催された。「何のために東京でオリンピックを開催するのか」という問いは、誘致以来、問われ続けたままだった。「オリンピズムは…生き方の哲学であり、…生き方の創造を探求するものである」と云うが。選手らは4年に一度巡ってくる「(永遠の) 今」にかけて、幾多の困難を乗り越え、(パンデミックでも) 世界中からその場に集う。そこで大会に関わる人々はどんな生き方を紡ぐのか。そうして生命の輝きと人間の美しさが映し出される時、感動が生まれる。「オリンピズムの目的は…人類の調和の取れた発展にスポーツを役立てることである」とされるが、スポーツは、どのように人類の発展に役立てられているのか。「何のために東京でオリンピックを開催したのか。」今なお続く軍事侵攻という現実の中で、体育・スポーツ哲学の研究者は、どのように認識するのか。人間と社会にとって、哲学が果たす役割とは何なのか。（田原淳子：本会報 Vol.25-2, July, 2021<巻頭言>）という巨大な問いの蛇が、私の頭の中でグルグルとどろろを巻いている。

2019年4月に母校である金沢大学で勤務することになり、30年ぶりに金大に戻った。担当科目は「スポーツの歴史（日本・西洋）」だった。4期クウォーター制で開講され、第1クウォーター（日本）では「嘉納治五郎」、第2クウォーター（西洋）では「ピエール・ド・クーベルタン」とオリンピズムに焦点を当てながら、オリンピックの歴史を通して「スポーツの歴史」を学び、「東京2020はどうあるべきか？」という今日的課題と哲学的問いをスポーツを専門としない一般学生らと率直に議論する機会を得た。

大学を卒業して以来、公立中高の教員であった私は、学校現場で保健体育と英語の2教科にまたがり、学級経営、生徒指導、道徳、特別活動に係る実践研究に明け暮れる15年を過ごした。教育現場では、いじめ、不登校、体罰・暴力、モンスターペアレント、育児放棄と、まさに今日的課題に直面する日々だった。『悲鳴を上げる学校』久しく、教育現場で教師に求められる実践（指導力）と大学での研究（教員養成）との乖離や限界ばかりが脳裏に映し出され葛藤していた。

こうしたジレンマによって、2010年春から東海学園大学で教員養成に関わることになった。その翌年からは中京大大学院で再び保健体育科教育を学び直すことになり、体育原理→スポーツ哲学と導かれ、気づくと「体育とは?」「スポーツとは?」と。そして私が45年以上続けている剣道で云うところの「武道とは?」という壁に突き当たっていた。と同時に、「部活動」にのめり込み、そこに教育的価値を見出してきた生徒であり、教師でもあった私は、スポーツ（部活動）における「体罰・暴力」問題にもぶち当たってしまった。

2015年秋に学位論文「日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO 相克—未来志向の剣道文化を求めて—」を提出し、2017年に『日韓「剣道」—KENDO と KUMDO の相克と未来』を上梓した。「武道」であることを重んじる日本剣道 KENDO とスポーツ化を目指す韓国剣道 KUMDO. オリンピックへの対応でも温度差がある両国の「剣道」について、歴史・文化・技術という視点から比較検証しながら日韓の剣道観を俯瞰しつつ、未来志向的な「剣道(武道)」の国際化・国際的普及のあり方をひたすら考え続けた。

現在は、全日本剣道連盟（国際委員会）や国際剣道連盟（FIK）といった組織の中で、その理論と実践の両輪が問われる段階にあるものの、これといった正解が見出せている訳もなく、コロナ禍もあいまって身動きが取れず、ただひたすら考え続ける哲学の日々だけだ。

小田佳子 (odayo@hosei.ac.jp)

大津克哉 (東海大学)

本年度は下記の要領で合宿研究会を開催します。今回も連休に重ねて土日・祝日(敬老の日)の日程で組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。新型コロナウイルス感染症拡大の状況によって中止する可能性があります。昨年はオンライン開催となりました。

期日：2022年9月17日(土)、18日(日)、19日(月・祝日)

場所：国民宿舎 箱根太陽山荘

(住所) 〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1320-375 (電話) TEL.0460-82-3388
小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり左手に/ケーブルカー脇の坂道を約50mほど登った右手にあります。

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)(*は運営委員会)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20時
17日(土)						受付	研究会①				夕食			
18日(日)	朝食		研究会②			昼食*	研究会③					懇親会		
19日(月)	朝食		研究会④			事務協議	解散							

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。大津 otsu@tokai-u.jp までよろしくお願いいたします。

☆費用：27,000円程度(予定)金額は変更になる場合もあります。

- ・研究会参加費：3,000円
- ・宿泊費等：24,000円(全日程参加の場合/2泊朝夕食、懇親会費を含む)
- ・中日の昼食代は別途1,500円
- ・学生、院生、研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆5月27日(金)必着にてお申込み下さい。

3ヶ月前までに予約を完了させねばなりません。人数把握のためにご協力ください。

・Eメール：お名前、ご所属、連絡先、発表の有無、宿泊のご予定(食事の有無を含む)について、東海大学 大津 (otsu@tokai-u.jp) までお知らせください。

・特に、部分参加の場合は、宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。[17夕食、17宿泊、18朝食、18昼食、18夕食、18宿泊、19朝食]

・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。

・10日前までにご連絡がない場合にはキャンセル料が発生します。宿泊前日は宿泊料の50%、当日は宿泊料の全額がキャンセル料となりますので、ご注意ください。

・不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡下さい。

☆詳しい「プログラム」は、9月中旬にお送りする予定です。

☆現在のところご案内通り9月に実施する予定ですが、これにつきましても今後の事態の変化を見ながら運営委員会にて実施の可否を検討することもあります。

いずれにしましても、運営委員会では会員の皆様に不利益が被らないよう、決定事項を速やかにお伝えするようにいたします。会員の皆様におかれましては、社会的にも精神的にも厳しい状況下ではありますが、それぞれの事情の下できる範囲で研究成果の蓄積をお願い申し上げます。

合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail: otsu@tokai-u.jp Tel: 0463-58-1211 (代表) Fax: 0463-50-2056

(お問い合わせは、なるべく E-mail またはファクスをご利用下さい。)

定例研究会

第1回定例研究会のご案内

森田啓（大阪体育大学）

下記のように第1回定例研究会を開催いたします。皆様奮ってご参加ください。

日 程：2022年6月4日（土）15：00～16：00

開催方法：オンライン（Zoom）

注意事項：

オンライン配信の閲覧情報はメーリングリストで配信します。メーリングリストへの登録をお願いします。会員以外が閲覧する場合は、会員から研究担当にご連絡ください。また参加者は当日実施する出席調査（Google Forms）に記入をお願いします。

15：00 代表挨拶 関根 正美（日本体育大学）

座長：千葉 洋平（岐阜薬科大学）

15：05 研究発表① 田中 愛（明星大学）

学校教育における「普通」の形成過程：「身体」はどのようにはたらくか

【概要】

本発表の目的は、学校教育における「普通」の形成過程を、身体の役割に着目しつつ考察することである。学校教育は、多くの人が「普通」を共有し、「普通に」生活することに貢献していると言えよう。しかし、このような「普通」に対する信憑は、理解できないものや理解できない他者と出会い、共存していくことを妨げもする。そこで本発表では、現象学における生活世界論を参照しつつ、なぜ普通を目指してしまうのかを改めて問い、「普通」と対比される「生きにくさ」（特に「身体」障害）への配慮が焦点化される際の、「身体」について考察を進める予定である。

16：05 副代表挨拶 深澤 浩洋（筑波大学）

【問い合わせ先：研究担当】

森田 啓 hirakumorita@ouhs.ac.jp

高橋 徹 t.takahashi@okayama-u.ac.jp

事務局より

田井健太郎(群馬大学)

○学会大会について

2022年8月31日から9月2日にかけて日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会が開催されます。今回も専門領域研究発表と領域横断テーマ別研究発表が準備されております。参加予定の方は公式HP等で情報をご確認いただき参加・発表申込み(研究発表申込み期間:4/1 9:00-5/11 13:00)をお願いいたします。

日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会ホームページ:

<https://confit.atlas.jp/guide/event/jspehss72/top>

○住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局(<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>)にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

また、専門領域メーリングリスト (talk@pdpe.jp)にご登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらに関しては、事務局(bureau@pdpe.jp)までご一報ください。メールアドレス変更の際も、事務局までご一報ください。

次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は、広報担当:田中(ai.tanaka@meisei-u.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第26巻第1号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

関根正美(代表)

編集者 釜崎 太, 田中 愛, 石垣 健二(広報担当)

発行日 令和4年4月22日

連絡先 〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付

電話:027-220-7326

【編集後記】

新年度がはじまりました。大学では対面授業も増えていることと思います。大教室の中の一人ひとりにどのように話しかけていたのだったか?うっかり忘れるところでした。新たな気持ちで日々トレーニングが必要ですね。

さて、今号には箱根合宿研究会についての案内をいただいております。今年度こそは対面が叶うのでしょうか。ご確認いただき、奮ってご参加いただけますようお願い申し上げます。

寄稿者の皆様からは、それぞれのお立場から、今まさに大切にすべき問題の数々を提起していただきました。忙しい日々を追われ、「今ここ」に流されそうになる中でも、ここではないところに思いを馳せ、考える時間を持つことの大切さを実感しています。改めまして御礼申し上げます。(a)